





被災直後は被災者が全員で困難な状況に耐えているが、一週間に共に生活していると、知的障害者や家族

東日本大震災で障害者と家族を襲った悲惨な状況とは。知的障害者と家族を支援する社会福祉法人「全日本手をつなぐ育成会」(東京)の田中正博常務理事に聞いた。(聞き手・林勝)

全日本手をつなぐ育成会

## 田中正博常務理事

### 障害者への支援——識者に聞く

への風当たりがだんだん強まってくる。

例えば、不安や緊張状態にある被災者らは周りの音に敏感になっている。知的障害のある人は、不

地域の顔見知りであれば、ある程度理解してくれるのでは。そうとも言えない。理解があると思っていた近所の人から「こんな時ぐらい静かにして」「どこか

避難所で生活できなくなり、その後どうしたか。

被災した自宅に戻ることを余儀なくされた障害者や家族は多い。被災を免れた親戚や知り合いの家を転々とする家族も。親戚宅では障害のある子どもを受け入れてもらえなかったため、子どもだけ普

く、孤立しがち。私たち支援団体が支援の手を伸ばそうにも、所在の確認が困難になってしまっ。健康者の側にいる人たちに理解してもらいたいことは何か。障害者とその家族は平時でも多くの困難に直面している。災害時には、障害者が普段通っている学校や作業所の機能もストップしてしまつので、家族の負担が一層高くなる。こうした弱い立場の人たちの過酷さは普通の人に比べてとても大きくなる、ということを知ってほしい。

## 家族の負担配慮を

安を言葉にうまく表現できないので、代償行為で声を上げたり、物を壊り返し出したりすることがある。それが周囲の人にとって大きなストレスになる。

に連れてってくれ」と言われた家族もいる。誰も通常の精神状態ではないので責められないが、知らない人から言われるよりも、本人や家族は余計に心が傷ついてしま

避難生活を送る人には行政や支援の情報が届きにく

## 仮設での冬支度 急ぐ

7カ月を過ぎた避難生活で、初めて寝込んだ沙也加さん。10月下旬には体調も持ち直し、学校にも通い始めたが、幸さんはあらためて家族の体が心配になった。

思えば、光一さんも新しい職場で悪戦苦闘している。「自宅から通っていた郵便局より、はるかに忙しそう」と幸さん。仕事

は同じ窓口業務だが、会津地方には塙さん一家と同様に原発周辺から避難してきた人々が増えた。貯金や保険など、避難生活を続けるための用事が多いのか、対応しきれないほどのお客がやってくるという。

会津の寒い冬への準備にも追われる。仮設住宅には、もうこたつを用意し、オイルヒーターも買ってきた。「狭いので、なるべく薄型のにしました」と幸さん。

そうするうちに、原発3\*<sub>0</sub>圏内住民の2

原発1\*<sub>0</sub>からの避難  
いつの日か

—21—

回目の一時帰宅が始まったが、一家は参加を見送ることにした。「高い放射線量も怖いし、生活に忙しいし」。何より、前回の帰宅時に痛感した「もう自宅には戻れないだろう」という思いが腰を重くさせる。

いやがうえにも、前を見て暮らさなくてはならない一家。「そういえば最近、仮設住宅をノックする人が増えた」。ドアを開くと見知らぬ男性たちが立っているが、自身の名前と町の今後を熱く繰り返す口調か

ら、すぐに用件は分かる。

震災後初の大熊町長選と町議選が、11月に控えているのだ。

**臨（はなわ）さん一家** 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、福島県会津若松市の仮設住宅に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生。